編　集　後　記

総合社会学部研究紀要編集委員長　小林　康正

台湾には多くの神々が祀られているが、人々からもっとも篤い信仰を集めているのが女神・媽祖だ。国内のそこら中に媽祖の廟が祀られ、参拝者が絶えない。日本でも、テレビの特集や観光ガイドブックの紹介で少しずつその存在が知られるようになってきた。

媽祖が台湾の人々を魅了してやまないのは、「進香（巡礼）」、「遶境（巡行）」という行事のおかげである。旧暦３月前後に、各廟の媽祖像が大集団を引き連れて長距離にわたる移動を敢行する。とくに台南の大甲にある鎮瀾宮と苗栗･白沙屯にある拱天宮の２つの媽祖行列は、ともに１週間以上 300 キロを超える行程となっている。一説によれば、延べ 100 万人の参加があり、途中立ち寄る寺廟は 100 か所以上になるという。これらはメディアで盛んに報じられ、メッカ巡礼、バチカンのクリスマス・ミサと並ぶ世界３大イベントの１つと自負されるほどの国民的行事となっている。

ところが、2020 年に起こった新型コロナの流行は、この行事にも大きな影響をもたらした。周知のように台湾の新型コロナ対策は、きわめて迅速に的確な手段を講じたことで、震源地中国と近接しながら、初期において有効に機能した。我々がたった一枚のアベノマスクを手に入れるのに難渋する中で、マスクのリアルタイム把握システムを実装させたデジタル担当相オードリー・タンの存在を羨んだ人も多いことだろう。

このように当初のコロナ対策が成功裡に進んでいたこともあって、篤い信仰をもつ大甲媽祖の関係者は、「媽祖がみんなを守ってくれる」と述べて、媽祖巡行を予定通り（もちろん対策をとりながら）実施することにしたのである。ところが、この決定は大きな批判を浴びることとなり、廟のフェイスブックは非難のコメントで炎上した。それでも踏ん張って２月 26 日には「予定通り実施する」と公表はしたものの、結局は政府衛生部の専門家の意見を聞き入れ、翌日には延期を発表せざるを得なくなった。直後の３月にヨーロッパの流行により帰国感染者が増加したことや、さらには軍艦の集団感染などが発生したことを考えると、結果的にみてこの判断は幸運だったといえるかもしれない。

それでも、毎年このイベントを心待ちにしている信徒は、この大甲鎮瀾宮の決定に失望した。それゆえ、廟の理事長は、「中止ではなく延期」と強調しなければならなかった。その後、台湾のコロナ感染対策は成功し、国内の感染例は４月中旬以降見られなくなった。6 月になって規制の一部が解除されると、7 日に 4 日後の 6 月 11 日から実施することを発表し、メディアはこれをコロナの「抑制の象徴」として伝えた。媽祖はコロナに勝ったのである。

こと改めて言うこともないが、新型コロナ感染症は、私たちの身体を犯すというだけでなく、社会全体を罹患させるような病苦であった。そこから「平常」に戻るために多くの苦痛を我々の社会は受け、さらにその「平常」は以前のものとは確かに異なるものになっている。台湾媽祖の紹介は、そのエピソードの一つである。

そして、今号で掲載した「公開シンポジウム「コロナを鎮める物語：妖怪文化を手がかりに」」（臨床物語学研究センター）は、そのより近い場所でのエピソードである。そこでの議論は、コロナという経験に対して「妖怪」という「物語」（集合表象）が持ちえた「結衆」の力がテーマとなって展開されているが、それはけっして自然と生じるものではない。河野隼也さんの試みはそれをどう発動させるかという周到で合理的な選択のチャレンジであったし、それによって新しい「平常」が創出されたのである。

コロナのようなそれ自体が不可知のチャレンジに対して、アマビエのような妖怪という不可知の物語を発動させることは、一見すると、不条理を不条理で打ち消すような試みにみえるかもしれない。その不条理さは、台湾の人々が、コロナから媽祖が守ってくれると言い、媽祖のプリントされたマスクをつけるような葛藤にも通じている。だが、そこには克服し得ると（形だけでも）信じる「物語」による「結衆」の力が働いていることだけは間違いあるまい。不可知の経験を物語化するためにヴァナキュラーな象徴が呼び起されたといってもいいかもしれない。

さて、今号では、新たに依頼論文というチャレンジをおこなってみた。冒頭に台湾媽祖を紹介したのは、曽心言･曽偉･林晶さんの論考「台湾妈祖联谊会与两岸妈祖庙际网络发展」の理解の一助とするためである。そもそも媽祖は莆田湄洲島が本家本元であり、華人の台湾開拓の歴史と不可分の存在である。そして現在も大陸との深い関係の中にある。これらは、周知のことであるが、曽氏らの論考はそうした事実が媽祖巡行の活況や現在の政治環境の中においてどのような意味を持ちうるのかを、中国側から語ったものである。媽祖の行事は、土俗的な信仰やおもしろい大衆的イベントという側面だけでみていいようなものではない。

そのことは、翌年 2021 年の鎮瀾宮の巡行の場に降り立ってみればわかる。神輿が出発する「起駕」の儀式には１万人余りの信徒が集まったが、そこに混じって台湾駐在の 13 か国の外交使節たちも招かれて出席していた。参加した米国在台協会（AIT）（= アメリカの対台湾窓口機関）はフェイスブックを通して、「台湾の宗教文化と人情の厚さを身に染みて感じた」、「台湾は新型コロナウイルス対策で優れた成果を上げており、これが『媽祖巡礼』を世界でも数少ない大規模な宗教行事にした」（ルビ：引用者）と伝えた。台湾媽祖の大衆的隆盛は、微妙なバランスの上に屹立しているのである。（編集の実務に関しては、野々山功一、立石尚史さんに大変お世話になりました。記してお礼とします。）

執　筆　者　紹　介（掲載順）

山　崎　　晶	京都文教大学総合社会学部総合社会学科准教授
平　塚　　力	京都文教大学総合社会学部総合社会学科准教授
林　　雅　清	京都文教大学こども教育学部こども教育学科准教授
小　林　康　正	京都文教大学総合社会学部総合社会学科教授
安　田　ひろみ	京都文教大学総合社会学部総合社会学科准教授
中　山　紀　子	中部大学国際関係学部国際学科教授
曽　　偉	莆田学院媽祖文化研究院常務副院長、媽祖文化研究センター主任教授
林　　晶	莆田学院外国語学院准教授、媽祖文化研究センター准教授
曽　　心　言	マレーシア大学東アジア学部博士課程大学院生
澤　　達　大	京都文教大学総合社会学部総合社会学科教授
佐々木　伸　子	京都文教大学非常勤講師
河　野　隼　也	妖怪文化研究家、嵯峨美術大学芸術学部デザイン学科講師（当時）
角　田　恭　平	株式会社ケイピーエス代表取締役、京都 GROWLY 代表

2023年度 編集委員会

*小林　康正　**平塚　力（2023 年 4 月～ 2024 年 1 月）
鵜飼　正樹（2024 年 1 月～ 2024 年 3 月）
*編集委員長（2024 年 1 月～ 2024 年 3 月）　**編集委員長（2023 年 4 月～ 2024 年 1 月）

京都文教大学　総合社会学部研究紀要
第二十五集

令和６年３月31日　発行

発行　京　都　文　教　大　学
〒611-0041　京都府宇治市槇島町千足80
電話　（0774）25-2400

印刷　（株）あ お ぞ ら 印 刷
〒604-8431 京都市中京区西ノ京原町15
電話　（075）813-3350